



宮森氏の『一畑劇場』懐かしく読ませていただきました。私も宮森氏と同年年なので、松江市殿町にあった一畑百貨店内の映画館のことは記憶に残っています。

私が幼少の頃、ゴジラやカメラといった怪獣映画を見るために親に連れて行ってもらっていたのは駅通りであった『東宝劇場』と『松江大映』（正式名称は違うかも）でした。現在ポートピア松江のある場所にこの二つの映画館が並んで建っていたのです。昭和四十年代初め、テレビの急速な台頭により日本映画産業が斜陽を迎える一歩手前の、散り行く最期の花を咲かせていた頃のお話になります。

私は小学校三年生まで国鉄松江駅南口付近の大正町に住んでいたため、映画館は歩いてすぐに行ける距離にあったのです。大抵子ども向けの怪獣映画は夏休みや冬休みに公開されていたので、終業式の日に学校で配られる映画の割引券（これも時代ですね）を親に見せては「連れてっておくれよう」とねだったものです。

映画館の周りは多くの人たちで賑わっておりまして。入口の上には大きな手描きの看板が飾られ、映画タイトルやキャッチが染め抜かれたのぼりが幾本も風になびき、道路に面した壁に設えた陳列窓には映画の

名場面をカラージュした白黒のスクリーン写真が貼られ、怪獣映画の公開中は子どもたちが目を輝かせてガラスにへばりつく様に眺めていたものでした。そして親に連れられ中に入ると、そこはもう異空間。怪獣のいる非日常の世界にどっぷりと浸かることができたのです。いまま劇場に入る度に、あの頃の胸躍るワクワク感が蘇ります。

実は当時、東宝劇場の映写技師を父の同級生のTさんがやっていた、映写室に何度かお邪魔したことがあります。本当なら部外者立入禁止であったに違いありませんが、そこは昭和という時代の緩さでしょうか。おまけに上映が終わった怪獣映画のスクリーン写真も譲っていただくことができたのです。売り物ではなく、一般には出回らない筈の貴重な宣材は私にとつて真正正銘のお宝でした。

あれから半世紀以上が経ちますが、あのときTさんから貰ったお宝は今も大切に保管してあります。時折引つ張り出して眺めては当時に思いを馳せます。今のように便利な世の中ではありませんでしたが、きっと良い時代だったのでしょ。

その後、これらの映画館は一九七〇年代に入ってから姿を消し、父もTさんもすでにこの世の人ではなくなりました。全ては追憶と忘却の彼方です。

專業ババ奮闘記 (その2)132

木幡智恵美

迫りくるコロナ (7)

大型連休初日は雨が激しくて外に出られないので、ほぼパソコンに向かっていた。二男が復活して安心したが、今度は長男のことが心配になる。仕事を終えてすぐに車で向かうと連絡が入ったのだ。夜中にトイレに起きた時から眠れなくなった。中古車を買ってすぐの時にスピード違反で免許停止になっているし、コロナ前に帰って来た際は高速道路でエンジンが停止し、ジャフの車に引かれ舞い戻って来ている。今度は事故でも起こしたらと、不安が募る。眠れないまま窓の外が明るくなり、お腹が空いたので早々に台所に降りた。

その日は寛大を預かることになっていて、夫が迎えに行っている間、長男から十時前には着くとメールが来る。今のところ無事なようだ。寛大が来て、まずは宿題をさせ、しばらくしてから長男が帰って来た。夜通しの運転で寝ていないだろうからとベッドメイクをしていたが、神戸のSAで五時間ほど仮眠を取ったので眠くはないとのこと。

前日とは打って変わった晴天で、長男と寛大と散歩に出ようとしていたら、「俺も行く」と、夫が付いてきた。脊柱管狭窄症を理由に、ほとんど歩きたがらない夫にしては珍しいことだ。途中何度か屈伸しながら、夫も床几山までたどり着いた。緋色や桃色、白色などのツツジが満開。「おお。おお」と声をあげ、長男は写メを撮って職場の同僚に送っていた。帰って四人で昼食を摂ってから、長男は昼寝、寛大と夕方のお迎えが来るまで過ごした。

翌日は、長男と夫と私で墓参りをした後、娘の家に向かった。寛大と実歩は長男にくつきまくるが、正月に初めて会って少し慣れただけの宗矢は、なかなか近づけずにいる。帰る頃になり、ようやく長男の膝に乗った宗矢。娘が撮った長男と宗矢のツーショットを、以後ずっと「おつつあん」「おつつあん」と言っては眺めているとのことだ。

三日目は、恒例になった土産用蕎麦の大量購入。開店まで時間があつたので大庭の方へ向かう。「懐かしい。俺、自転車で転んだの、ここだったよね」「ここで蟻の鏡を作ったね」と、かんの里から風土記の丘を歩きながら、この地に残された映像を振り返った。二泊三日、コロナ騒ぎは一旦忘れ、長男と久々の、ゆったりした時間を過ごせた連休前半だった。

30代フリーター 政府が新型コロナウイルスを季節性インフルエンザなどと同じ「5類」に引き下げ、マスクの着用は屋内外を問わず個人の判断にゆだねることを決めた。

年金生活者 しなければならぬことによつと手をつけようとしている。専門家や医療機関の力、私が「医療権力」と呼んでいる力がこれまでそれを阻んできた。国民の生活様式まで指図するこの権力に「国家権力」（政府）も「市場権力」（企業、消費者）も押されつばなしだった。ここにきて「市場権力」がインフレというコロナ以上のリスクを突きつけ、押し返し始めた。それにあと押しされた「国家権力」が巻き返しに出たのが、こんどの遅すぎた政策転換だ。

30代 日本のコロナ対策は多くの諸外国と違って、「強制」ではなく、国民の「自粛」によつて進められてきた。年金 他の多くの国々ほど日本の国家権力は強くない。日本国民には国家による「強制」を嫌う一面がある。その

れを「5類」扱いして日常生活を送ってきた気がする。「5類」という用語を知っていたわけではない。もしコロナの検査を受けさせられるはめになり、そこで陽性と判定されて隔離でもされたらかなわないと思つて、咳や熱やのどの痛みがあるくらいでは医者にかからないと決めていた。前からずつとそうしてきたように。

幸い、咳も発熱もどの痛みもなく、今に至っている。電車の車内などでそばのだけれかが咳やくしゃみをしたら、とつさに息を止め、その場を離れるのを私流の風邪の予防法にしてきたので、それをコロナにも使おうと思つていたが、気がつくくと、咳やくしゃみをする人はほとんどいなくなつていた。「自粛警察」への警戒感が広がっているのを感じた。

やがてコロナがオミクロン株に変異すると、国民の大多数がマスクを着用しているにもかかわらず、感染者数が世界のトップレベルになるという皮肉な事態が出来し、マスクの効果が疑わ

代わり、進んで「自粛」するメンタリティーを持つ。

この心性は国家の形成や更新をいつも他の大国に強いられ、頼つたりしてやつてきた歴史に由来する。その大国は前近代では中国であり、近代では欧米だった。国家のない縄文時代が1万年も続いた結果、日本人の心性には国家を拒む要素が培われ、のちに外圧によつて国家を形成せざるを得なくなつてからも、その要素が温存されてきた。「自粛」に熱心なのはそうした心性に由来すると推定される。

30代 安倍晋三は「自粛」に頼るコロナ対策を「日本モデル」と自賛していた。

年金 柄谷行人の交換様式論の助けを借りてそれを説明することもできる。柄谷は歴史の各時代に支配的な交換様式がA（互酬⇨贈与と返礼）、B（服従と保護⇨略取と再分配）、C（商品交換⇨貨幣と商品）の順に推移したと考える。縄文時代はこのうちAが支配的だった時代に当たると。ここでは、何

れだした。屋外ではもうマスクを外していた私は電車内でも買い物する店でもマスクをしなくなった。ただし、いつも出ている小会合やうるさそうな飲食店では「同調圧力」に逆らわず例外的に着用している。

30代 医療界の発言力の強さはどこから来てるんだろう。

かを贈られたら返礼しないではいられない心性が人びとをとらえている。

それが今に至るまで温存されていて、マスク着用による感染防止という「贈与」を受けたら、自らもマスクをして「返礼」せずにはいられない気持ちを引き起こす。そうさせる力を柄谷は「霊的な力」と呼ぶ。政府が屋外ではマスクを外していいといっているのに、大多数の国民が着用を続けているのはその力が働いているからだ。

コロナ禍の中で国民が「医療権力」に感じていたのも「霊的な力」だ。行動制限を説いてやまない専門家や医師会、病院業界の振る舞いや発言は呪術か呪文のように響いたに違いない。命が最優先される今の時代は、あたかも医療が人びとの生殺与奪の権を握っているかのような通念が行き渡っているからだ。

30代 ジイさんはその「医療権力」が気に入らないようだ。

年金 いま振り返ると、コロナが流行しだしてしばらくたったころから、その「医療権力」が「新しい生活様式」と称して国民の箸の上げ下ろしまで指図する権限があるかのように生活の細部にまで口出したのは、「医療」という限定された視点からしか社会を見ることができなかった。そして国民がこの権力を国家や市場よりも信用し、支持してきたからだ。

「医療」は社会の一部に過ぎないのに、その原理を社会のあらゆるところに当てはめようとすれば、感染症に対しては一切の社会活動を止めるのが最も有効という結論に導かれる。「医療権力」はそれに近づこうとした。「命が第一」が原理となつて現在の社会では、それが国民によつて支持された。

「医療権力」は自らが主導したコロナ対策によつてインフレを広げた。その結果、以前ほど国民の支持を得ることができなくなり、後退を余儀なくされた。先月末の共同通信の世論調査で「5類」への引き下げに賛成が62%に達しているのがそれを示している。

ニュース日記 864
中村 礼治

「医療権力」の後退